令和２年度第２回北海道史編さん委員会議事録

日　時：令和２年 11 月５日（木）14:00～15:20
場　所：かでる２・７　1060 会議室

１　開　会

２　議事
（１）各部会・小部会の活動状況について

（２）『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について

（３）資料編の資料収録形態について

（４）その他

３　閉　会

1　開　会

○杉本主幹

令和２年度第２回北海道史編さん委員会を開催します。私は北海道文書課道史編さん室主幹の杉本です。よろしくお願いします。

北海道史編さん委員会は、例年６月から７月に開催してきておりますが、本年は新型コロナウィルスの影響で４ヶ月ほど遅れての開催となりました。ただ業務の都合上、早期に委員の皆さんの承認をいただいて委員長を選任する必要がありましたことから、８月に書面で第１回委員会を開催させていただいきました。委員長には、ご案内のとおり小磯修二氏が満場一致で引き続き選出され、ご就任いただております。

では、第２回北海道史編さん委員会の開会に当たりまして、平野総務部長より一言ごあいさつ申し上げます。

○平野総務部長

総務部長の平野でございます。北海道史編さん委員会の開催にあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

小磯委員長をはじめ、委員の皆様方には本日ご出席を賜り、厚く御礼を申し上げます。今年はコロナの影響で、今回が実質第１回目の開催です。北海道 150 年の節目の年にスタートした道史編さん事業も、今年で３年目になり、皆様方のご協力により活動を重ねてきております。この道史編さんは 10 年間という期間の事業で、決して十分な期間とは言えないかと思いますが、多くの関係者のご理解、ご協力をいただきながら、着実に進めていただいておりますことにつきましても、改めて感謝を申し上げます。

これまで資料の調査が中心でございました編さん事業ですけれども、今年度からは刊行に向けて具体的な作業も加わってきています。そのため今回の委員会では、最初に刊行される資料編の構成ですとか、資料収録の形についても、委員の皆様にご審議いただくこととなっております。

皆様ご承知のとおり、今年７月には民族共生空間ウポポイがオープンいたしまして、国立アイヌ民族博物館の歴史展示を通じて、アイヌの方々の歴史、そして北海道の歴史に関心を持つ方も多く広がっていくことが大変期待されているところです。そして新たな道史につきましては、こうした方たちの期待に応えていく必要があると同時に、専門家の方々の評価にも堪えていける水準を保ちながら、長く信頼できるものを編さんしていかなければならないと考えているところです。

そして、私ども行政を担う者といたしましても、これまで行われてきた政策を振り返りながら、北海道がどう変わってきたかを認識し、今北海道でコロナの感染者が大変多くなってきておりますが、ウィズコロナ、ポストコロナの時代に今後どういった政策を立案していくかということにとっても、大変重要な資料になると考えております。

委員の皆様におかれましては、充実した道史の実現に向け広い視野からの活発なご議論、ご審議をいただきますようお願い申し上げ、簡単ではございますが、私からのご挨拶とさせていただきます。よろしくお願いします。

○杉本主幹

平野総務部長は所要のため、これで退席させていただきます。議事に移らせていただく前に、本日ご出席を賜った委員の皆様をご紹介します。まず、本委員会の委員長であります一般社団法人地域研究工房代表理事の小磯修二様です。

○小磯委員長　小磯です。よろしくお願いします。

○杉本主幹　ＮＰＯ法人スプリングボードユニティ２１理事長の折谷久美子様です。

○折谷委員　折谷です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　公益社団法人北海道アイヌ協会事務局長の貝澤和明様です。
○貝澤委員　貝澤です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　北海道農業協同組合中央会専務理事の柴田倫宏様です。
○柴田委員　柴田です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　北海道史研究協議会会長の田端宏様です。
○田端委員　田端です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　雑貨 Style 主宰の中村真実様です。
○中村委員　中村です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　札幌大学元学長の桑原真人様です。
○桑原委員　桑原です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　北海道大学名誉教授の坂下明彦様です。
○坂下委員　坂下です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　札幌女性史研究会代表の西田秀子様です。
○西田委員　西田です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　連合北海道事務局長の藤盛敏宏様です。
○藤盛委員　藤盛です。よろしくお願いします。
○杉本主幹　帯広大谷短期大学副学長の吉田真弓様です。
○吉田委員　吉田です。よろしくお願いします。
○杉本主幹

なお、北海道漁業協同組合連合会代表理事常務の伊藤貴彦様、北海道経済連合会専務理事の瀬尾英生様、北海道森林組合連合会代表理事副会長の富田満夫様、株式会社北海道新聞社常務取締役の宮口宏夫様の４名におかれては、本日は所要のため欠席となっております。続きまして、事務局の紹介をさせていただきます。

○若原次長兼行政局長　総務部次長の若原です。よろしくお願いします。
○宮森文書課長　総務部文書課長の宮森です。よろしくお願いします。
○靏原室長　総務部文書課道史編さん室長の靏原です。よろしくお願いします。
○杉本主幹

本日の出欠状況について報告します。委員総数 15 名のうち、本日は 11 名の出席により、北海道史編さん委員会条例施行規則が定める２分の１以上の委員の出席という開催要件を満たしていることを報告いたします。

資料の確認をさせていただきます。本日の次第、出席者名簿、配席図、道史編さん委員会組織図、資料１　各部会・小部会の活動状況、資料２　『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成案、資料３　『北海道現代史』資料編収録要領、資料４　資料編掲載サンプル、資料５　道史編さん機関誌「北海道史への扉」第２号構成、参考資料１から４までとなっております。不足している資料がありましたらお知らせください。

それではこれより議事に移ります。これからの進行につきましては、小磯委員長にお願します。

２　議　事

○小磯委員長

引き続き委員長の職を務めさせていただくことになりました。改めてよろしくお願いします。編さんの活動も３年目に入ったということで、平野総務部長からも説明がありましたように、調査から刊行に向けて少し具体的な作業が始まりました。委員会は基本的に年１回の開催ですが、長期にわたる編さん作業に向けて、皆様方から大局的な立場でお気づ

きの点や提言、忌憚のないご意見をいただければと思いますのでよろしくお願いします。

（１）各部会・小部会の活動状況について

○小磯委員長

早速議事に入ります。１番目の各部会・小部会の活動状況について、事務局から説明をお願いします。

○靏原室長

各部会・小部会の活動状況の前に、初めてご出席される委員の方もいらっしゃいますので、まず資料で配付しております委員会の組織図をご確認いただきたいと思います。

この道史編さん委員会の下の実働組織としては、まず企画編集部会がありまして、各部会の部会長を中心に構成され、全体の企画や調整を行っております。その下に枝を広げている部会のうち、左の４つは『北海道現代史』を担当する部会で、右端の概説部会は、考古から現代までを叙述する『北海道クロニクル』を担当します。

現代史の各部会は、それぞれ資料編１～３を編さんすることになっており、社会・文化小部会と教育小部会は、両方で１巻の社会・教育・文化編を編さんすることになっております。最初に刊行されるのは、産業･経済部会が担当する資料編２で 2022 年度に、資料編３が翌 2023 年度に、そして資料編１が 2024 年度に刊行されます。その後、通史編１・２を 2025～2026 年度に刊行し、『北海道現代史』全５巻を完成させる計画です。

2027 年度は 10 年計画の最後の年になりますが、概説部会による『北海道クロニクル』上下巻と、事務局が主に担当する『北海道史年表』を刊行することになっています。『北海道クロニクル』は、考古から近世までを扱う上巻を前近代小部会が担当し、近代以降を扱う下巻を近現代小部会が担当します。

それでは、ここに示した各部会・小部会の活動状況を、資料１でご報告します。昨年の道史編さん委員会でご報告して以降、令和元年７月からの主な動きです。

企画編集部会は、主に各部会・小部会の代表者である８名の専門委員で構成されています。企画編集部会の桑原編集長・坂下副編集長は本日の委員会のメンバーでもいらっしゃいます。部会はこの間、２回開催されており、直近の先週 10 月 26 日に開催された令和２年度第１回の部会では、この委員会に提出する議案を中心に検討されました。

企画編集部会の下には、道史編さん機関誌「北海道史への扉」編集小部会が新たに設けられ、企画編集部会のメンバーのうち３名が小部会委員を兼務し、発行に向け計３回の部会が持たれました。

続いて資料１－２をご覧ください。政治・行政部会は『北海道現代史』の政治・行政分野を担当する部会で、右端にそれぞれの委員が担当する分野を記入していますが、部会長である山崎委員が戦後後半期を、その下の前田委員が戦後前半期を担当するというように、この部会では時代で分担しています。前田委員は昨年 10 月からの新規の調査研究委員、また木村委員は今年８月からの調査研究協力委員で、引揚者関係の分析を担当されています。小川委員は、政治・行政部会だけではなく、産業・経済、社会・教育・文化の現代史の各部会に所属し、各分野でのアイヌ関係を一括して受け持つとことになっています。

３の資料調査活動ですが、現代史の各部会は、現在、資料調査を中心に活動しておりまして、どのような分野で、いつ、どこに調査に出かけたかを表にしています。なお、ここでは実際に出かけて調査したもののみを挙げており、出かけずに取り寄せた資料の読み込みや分析などは、これとは別に各委員のお手元で随時行われております。

続いて資料１－３をご覧ください。産業・経済部会は、坂下部会長以下 16 名で構成され、右端にあるように各分野ごとに分担されています。構成員の一番下にある大藤委員

は、概説部会で近代史の担当ですが、この９月から産業・経済部会にも所属して、労働を担当していただくことになりました。この間の部会開催は２回です。本日の委員会で次の議題になっている「産業・経済編の構成案」についても、８月に開催された令和２年度第１回部会で検討されたものが下敷きになっています。３の資料調査活動は、３頁から５頁に記載されておりますが、最初に刊行されるのが産業・経済編ということで、各企業や団体等も含め多岐に亘って調査が進められました。

資料１－４をご覧ください。社会・文化小部会の構成員は小内小部会長以下 14 名で、それぞれの委員の担当分野は、表の右端にあるとおりです。一番下の菊地委員と秋野委員が新規の調査研究協力委員です。小部会は２回開催され、資料調査活動は、調査分野ごとに６～７頁の通り表にまとめております。

資料１－５をご覧ください。教育小部会は横井小部会長以下 14 名の委員で構成されています。うち下から４人目の藤根収委員は、これまで障害児教育を担当していただいた委員が体調不良で辞任されたことから、今年６月に新規就任していただいています。この間の小部会の開催は１回、担当ごとの調査研究活動はご覧の通りです。

資料１－６をご覧ください。概説部会の構成員は、桑原部会長以下 12 名です。『北海道クロニクル』全体としての構想は昨年度までにほぼ固まったことから、今期、概説部会としての部会は開催されず、その下にあるとおり、前近代小部会と近現代小部会とに分かれて活動しております。

いずれの小部会も、時代区分やそれに基づく分担を検討しているところで、例えば前近代小部会の令和２年度第１回小部会では、谷本小部会長のご意向で、アイヌ史研究の最新の成果ともいえる国立アイヌ民族博物館の展示の考え方について知見を得たいということで、オープンしたばかりの博物館の館長以下４名の職員の方をお招きして、お話を伺い、委員との間で活発なディスカッションが行われております。

以上が、各部会・小部会の昨年７月からの１年４ヶ月間の活動状況の概略です。新型コロナウィルスの影響で、３月下旬から５月くらいまでは、資料所蔵機関の閲覧ができなかったり、移動の自粛要請があったりで、資料調査がなかなか実施できずにいました。また委員の大半は大学の先生ですが、リモート授業への切り替えに伴って業務が増大し、道史に割く時間が取りづらくなったということを聞いております。そうした影響はありながらも、ここまで進められたところです。

今後の予定として、資料１－７をご覧ください。各部会・小部会の今後の活動予定を挙げております。次回の委員会は来年の７月頃を予定しておりますが、それまでの間の部会・小部会の開催や主な活動内容、検討課題をまとめています。これら各部会での活動予定についても、委員会でのご了解をいただきたいと思います。

○小磯委員長

コロナの影響で活動が難しい状況もあったと思いますが、これまでの活動や今後の予定を説明いただきました。編集長を務めている桑原先生から何か補足の説明はありますか。坂下先生はいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

事務局から説明があった中身について、皆さんからご質問、ご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○中村委員

中村です。これだけの膨大なデータを紙媒体以外でどのように保存しているのでしょうか。

○小磯委員長

事務局からお願いします。

○靏原室長

デジタルカメラで撮影したものをデータで保存しており、必要なものだけを紙出力しています。調査後、先生方にお渡しするのもデータ形式がほとんどです。保存方法は、これまでハードディスクに保存していたのですが、安全性を考え現在はサーバーで保存しています。調査を重ねるにつれてかなり膨大な容量になっており、保存には十分注意しています。

○小磯委員長

よろしいでしょうか。ほかにありますでしょうか。

○折谷委員

各部会の委員の先生方が真摯に調査されているのがよくわかりました。コロナ禍で図書館が休館されたり、人との接触に制限がかかったりという状況の中で、委員の先生方が資料収集でご苦労されたこともどこかで掲載いただきたいと思いますが、そういうことは考えておられますか。

○小磯委員長

これまでの部会で、そうした議論はありましたか。

○桑原委員

現在編集中の、機関誌「北海道史への扉」第２号で紹介していく予定です。

○小磯委員長

「北海道史への扉」で編さん作業の状況を発信しておりますので、そこでご苦労などにも触れていただければと思います。ほかに何かありますでしょうか。

○貝澤委員

８月 26 日開催の概説部会前近代小部会で、国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ史展示の考え方や時代区分について報告されたということですが、ここで話された時代区分などについては、今後、継続して議論されていくということでしょうか。

○小磯委員長

事務局からお答え願います。

○靏原室長

国立アイヌ民族博物館の方々からウポポイのアイヌ史展示の考え方などについてお話をいただき、ディスカッションの後、部会委員のみで道史での時代区分について検討されましたが、時間がなく次回に引き継ぐことになりました。資料 1－7 の今後の予定にもありますが、12 月から来年１月にかけて前近代小部会を開催し、今までの議論を踏まえて、時代区分の考え方をまとめる予定であると谷本小部会長から伺っています。

なお、国立アイヌ民族博物館の方々をお招きしての小部会の内容については、「北海道史への扉」第２号で谷本小部会長にご寄稿いただく予定になっています。

○小磯委員長

前近代小部会で時代区分について今後、議論や検討をしていただく予定になっているということですが、ほかにいかがでしょうか。

○西田委員

「新札幌市史」の編さんをしていた経験というか、反省のうえに立って確認したいのですが、各部会に共通する事項というのがありますけれども、その棲み分けをどういうふうにするのか、どこの部会が重点的に書いて、他の部会がどのように各論を書くかという、その作業と中身についてお尋ねしたいと思います。

一つは占領期の連合国軍の組織や機能などについてです。よくあるのは政治・行政部門のところに、建物接収も含めて講和条約の締結までを入れるというのが一般的だと思いますが、拝見しますとまだ出版が先ということもあってここには入っていないようです。もし政治・行政部会の先生が４人しかいらっしゃらなくてご負担が大きいというのであれば、

例えば教育小部会の大矢先生にはすでに研究の蓄積があるわけですので、私が言うべきことではないのかもしれませんが、大矢先生に戦後前半期のところに部分的に入っていただくとか、そういった調整を企画編集部会でしていただければと思います。

あと棲み分けについてですが、例えば占領期に札幌に疎開した編集者による出版ブームというのがあったのですが、時代を表す特徴的なことだと思いますので、そういった出版文化についても社会・文化の方で入れていただければと思います。

それから占領期の検閲についてですが、産業・経済部会の情報通信、ラジオ放送と新聞のところで検閲が取り上げられるようですけれども、検閲についてもどこか主たる部会で資料を集めて書いていただければと思います。ＧＨＱが検閲のために収集した膨大な資料は、アメリカのメリーランド大学に持ち帰ってプランゲ文庫の開設につながったわけですけれども、その複製が道立図書館にかなり入っています。例えば北星学園大学の谷暎子先生は検閲とプランゲ文庫に関する研究実績があって、実際にどういったところが検閲で削除されたのかということも細かく研究されています。そういったことも取り入れていただくと、時代や地域をよく表せるのではないかと思います。

それから、大藤さんが労働で新しく産業・経済部会に加わられたということですが、労働運動は社会のところに項目立てされることが多いのですが、今回は産業・経済編に労働政策と運動とが一緒に入るということでしょうか。坂下先生にお伺いします。

○坂下委員

本来でしたら政治・行政が先にあって、それに関わって産業・経済が動いている訳で、そういう順だとスムーズに行ったのですが、全体の調整が必要な部分はまだかなり残っているというのが実態です。資料を選択する中で、別の巻との調整も行いながら最終的に決定していくという形になるかと思います。企画編集部会では大きい話しかできないので、具体的な調整となると、担当者同士、また事務局を含めて進めていくことになると思います。

労働については、他の県史でも色々な形があり社会で扱っているところもあるわけですけれども、労働そのものが産業との関わりが非常に強くここに置きたいということで、産業・経済編の全体の流れからは異質な感じもあるわけですけれども、一番後ろに補強するような形で置いています。

○西田委員

解説を書くときに、何故ここに置いたかという理由を、わずかでもよいので書いていただくと利用者側は分かりやすいと思います。

○坂下委員

今はどの資料をセレクトするかという段階ですが、これからそれをもとに解説を書いていくことになります。当然、全体をどういう配置にしているかということを冒頭に置いた上で、それぞれの分担について解説していく形をとることになると思います。

アイヌの問題についても共通事項になっていますが、小川委員から出していただき、それを各分担の中に入れ込みながら全体の調整を図るという形をとっています。

○小磯委員長

西田委員、よろしいでしょうか。

○西田委員

横の連携を取っていただきたいということをお願いしたいと思います。

○小磯委員長

わかりました。今、坂下先生お答えされましたように、作業を進めながら、これから全体の調整が行われるということです。

きれいに棲み分けできるように全体の調整を図るというのは、実は大変な作業だと思わ

れますし、今坂下先生がおっしゃったように、企画編集部会で細かいことまで全て調整というわけにはなかなかいかないと思います。その辺は事務局にもサポートしてもらいながら、こうした委員会の場や各部会で個別にご意見を出していただく、その積み重ねの中で全体のバランス、良い意味での棲み分けができるような作業を目指していくことが大事ではないかと思います。

他の委員の皆様も、そのような点も含めてもしご意見があれば、個別の意見でも結構ですので出していただければと思います。事務局から何かありますでしょうか。

○靏原室長

占領期の文書についてご指摘がありましたけれども、国立国会図書館にあるＧＨＱ文書については、網羅的に使用・研究された実績が北海道ではあまりないと思いますので、北海道関係の文書を事務局で抽出し、目録についても現代史の委員の先生方全員にご紹介したところです。それを政治・行政部会の委員の先生がどう切り取るか、産業・経済の方ではどう切り取るか、あるいは大矢先生でしたら教育のところで書いていただけるときの参考にしていただくということで、それぞれ活用いただけると思っています。

調整の大変さについては最近実感しているところでありまして、大変ありがたいご意見だと思います。

○小磯委員長

ありがとうございました。戦後史を調査していく中でＧＨＱ関係の資料は非常に大事な資料だと思うので、活用していただければと思います。

今、ご説明いただいた各部会・小部会の活動状況と今後の予定について、他にご意見はございますか。よろしければ、今皆様からいただいたご意見については、関係するところにお伝えいただいて、その点にご留意いただきながら今後の編さん業務を進めていただくということを前提に、各部会の活動報告と来年７月までの活動予定についてはご承認をいただいたということでよろしいでしょうか。ありがとうございます。そのように進めさせていただきたいと思います。

（２）『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について

○小磯委員長

それでは議事の２『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について、事務局から説明をお願いします。

○靏原室長

『北海道現代史』資料編（産業・経済）は、2022 年度末に刊行予定の最初の道史です。まず 35 頁の「参考資料２　道史編さん計画」をご覧ください。昨年７月の道史編さん委員会で決定されたものです。その「第３　刊行の方法」を見ていただくと、現代史の資料編は、資料と解説で 1,000 頁、その他口絵、凡例、目次等 50 頁で、計 1,050 頁。A5 判の上製本で仕上げられます。また同時にデジタル化も行う予定です。

資料編というのは、資料の翻刻とその解説からなりますが、ここで取り上げるべき資料は、「第４　編さんの方針」の現代史のところで、「 (2)様々な事象の中から、北海道の特徴や独自性を表すものを、意識的に取り上げる」とし、資料の種類も「(3)文献資料を中心に、映像・音声資料や関係者からの聞き取りなど、道内外にわたり広く多彩な調査収集に努める」としています。またその解説については、「(5) 各資料ごとに内容や取り上げる意義についての解説を付し、一般道民が興味深く読めるように配慮する」と書いてありまして、こうした方針で資料編が作られることになっております。

13 頁に戻っていただきます。産業・経済編のおおよその構成と、どのような資料をそ

こで取り上げていくのかをまとめたのが資料２で、まだ検討段階の「素案」ではありますけれども、現時点での到達点をお示しして、委員会の皆様のご意見を伺いたいと思います。

全体は10章からなります。「第１章　地域経済と経済政策」は戦後北海道経済の総括的な部分で、以下産業別に、第２章農業、第３章林業、第４章水産業、第５章工業・情報通信、第６章商業、第７章建設・交通、第８章鉱業・エネルギー、第９章金融・観光・サービス業と並び、第10章で少し毛色は違いますが「労働」を置くという編成です。

基本的な編目構成としましては、各章の下に節があり、その下に(1)(2)という項があり、項の下に資料が時代順に並ぶという構成です。掲載候補資料として挙げている黒ゴシックがその資料に付ける表題で、続く括弧内にあるのが出典で、現時点での掲載候補ということになります。最終的に掲載する件数は、一冊分でおおよそ350～400件程度になる予定です。

まだ未調整の部分がある状態ということで、先日の企画編集部会で出されたいくつかの課題を先にお伝えしておきますと、節が年代を示す場合とジャンルを示す場合とで混在しているため、できるだけ合わせた方がよいという意見のほか、「第１章第１節地域開発」ですけれども、これが政治・行政部会で取り上げるべきテーマと重複しているので、整合性をとる必要があるとの指摘がありまして、今後修正が図られるということになっています。

また第七章で建設と交通を扱うこととしておりますが、建設業は空欄になっております。建設業の追加が必要ということが固まったのが遅かったためです。まだ資料では「担当者選考中」となっておりますが、つい先日、適任者が見つかりまして、ご本人の委員就任へのご了解もいただいたので、来年度の委員会までには、この空欄部分を埋めるべく進めていただけるものと思っています。

続いて第十章の労働です。雇用の側面は第１章第２節「経済構造と雇用」で扱い、この章では労働運動が中心になります。北海道の戦後は労働運動が特に盛んで、重要な章になると思いますが、担当委員の体調不良で構成や掲載候補を出すに至っていません。そこで、調査研究協力委員として大藤委員を９月に補充し、早速資料調査に取り組んでいただいています。

雑ぱくなご説明ですが、以上が現段階での構成素案です。来年度の委員会では、提出案に対して改めて印刷刊行を可とするご承認をいただき、計画通り2022年度に出版したいと思いまおりますが、そのためにも今回は、この素案に対する委員の皆さんのご意見をいただいて、残された期間の取り組みの指針としたいと考えております。

○小磯委員長

ありがとうございました。具体的な編さんの形を初めて見るような思いがいたしますけれども、一番先行している産業・経済の資料編の構成案ということで今日はお示しをいただきました。事務局から説明がありましたように、最終的な中身については来年度の委員会でご検討いただくわけですけれども、素案、スキームと言いますか、今示された構成案について、今日は皆様からご意見をいただきたいと思います。

坂下先生から補足してご報告いただけることはありますか。

○坂下委員

いま事務局から報告がありましたように、適切な担当者がなかなか見つからないという状況でしたけれども、メンバーが揃ったということでほっとしています。

産業・経済部会では、研究会をやろうということで３回ほど続けて中断していたところにコロナが発生し、横同士で議論するという点でうまく行っていないところがあります。ただ資料編については、いかによい資料を集めて来るかということですので、そこにそれぞれ力を注いでいただくということで途中から部会の活動方式も変えたところです。

基本的には一つ一つの資料がきちんと集まっているというのが大事だと思うのですが、章・節・項がもう少し系統立った形で構成した方がよいということであれば、章の規模の差もあり難しい面もありますが、もう少し整理をしたいと考えています。

○小磯委員長

ありがとうございました。まだ最初の段階ですから、基本的な視点も含めてご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○吉田委員

私事ですが、７年前に亡くなった私の父は長く労働運動やっていて、トムラウシの電源開発のときに富村の三原則を作った人間です。十勝地区の労働組合の委員長を長くやっていましたが、資料はどこにも渡さず全部持っています。十勝地区に偏ってはいますが、資料をお入り用であれば労働運動の担当の先生にお渡ししたほうがよろしいでしょうか。どうしましょうか。

○坂下委員

ありがとうございます。是非お願いしたいと思います。保存についても考えさせていただき、事務局から連絡させていただきます。

○小磯委員長

ほかにいかがでしょうか。私もこの構成案を拝見させていただいて少し感じたところがございます。

この道史編さんの取り組みは、北海道 150 年事業の検討委員会の中で、北海道の歴史をしっかり後世に伝えていくことが大切だという議論がなされたのが背景にあったかと思います。その時の論点の一つに、政策の歴史をしっかり残していこうという議論がありました。政策の歴史をどういう分担で書き分けていくのかというのは、今回の道史編さんの中で大切な視点ではないかと感じています。

特に地方政治や行政が、北海道の地域の課題解決や発展に向けてどういう役割を果たしてきたのかという政策の系譜については、政治・行政部会と、例えば産業・経済部会とでどういう分担で執筆されるのかという問題意識で構成案を拝見しました。

第一章第一節の「地域開発」の部分では、いろいろな政策の系譜を追っていますけれども、ここの部分はやはり政治・行政の方とかなり丁寧な調整、意見交換をしていただきたいと感じました。順番で刊行していくため、時間差のある作業であることの難しさがありますから、先行したものの成果に後の作業がある程度影響を受けることになります。ですからその点を意識した調整、この段階での議論が大事だということですね。個別の調整は大変難しいとは思いますけれども、政治・行政部会ではかなり丹念な一次史料の収集もやっておられると聞いていますので、よい意味で両者の連携がうまくとれるように進めていただければと思います。

また少し具体的なお話ですが、第一章は地域経済と経済政策ということで、北海道の戦後の地域経済を追っておられますけれども、北海道は経済白書を他の地域に先駆けて刊行したり、北海道独自の経済分析のツールがあったり、そうした動きを私は若い頃東京で見ていました。経済分析に関する北海道の先進的な取り組みは、全国的にも高く評価されていましたので、そういうところもせっかくの機会ですので、きっちり後世に残していく取り組みをお願いします。あくまでも私個人の委員としての、この構成案への感想を申し上げました。

ほかに特になければ、今日の委員会の意見を踏まえた形で、引き続き検討作業を進めていただきたいと思います。この件は来年の委員会で改めてご審議いただき、その検討結果を踏まえて刊行していくという流れになると聞いておりますので、よろしくお願いします。

（３）資料編の資料収録形態について

○小磯委員長

議事３資料編の資料収録形態について、事務局から説明をお願いします。

○靏原室長

資料３をご覧ください。先日の企画編集部会で決定された『北海道現代史』資料編収録要領で、資料編の凡例にあたるものです。資料編の掲載資料は基本的に原本を忠実に再現して載せるものですが、読みやすさへの便宜上一部を改変したり、補ったり、また出典や日付などの情報を付加していくことになります。筆耕作業を前に、資料編３巻の共通のルールを定めたところです。

このルールに従って翻刻したのが資料４の掲載サンプルですので、工夫改善点などご意見をいただきたいと思います。

例一は第二章農業で掲載候補となっている資料です。まずゴシックで書かれている表題、これは資料名そのものではなく、編者が資料の内容を示すものを独自に掲げることになっています。次にこの資料の作成年月日が入り、それ以降が資料の翻刻です。この資料は、北海道の畑作を変えていく大きな契機となった法案を成立させようというときの農林水産委員会での担当役人の説明を国会議事録から抽出したものですが、説明する政府委員の名前を資料のとおりに翻刻するだけではなく、例えば①のように、わかる範囲で役職まで補ってあげるのが親切だろうということで、角括弧で農林省振興局長という役職を補っています。必要な部分を抽出した後は、その出典が記され、ここでいえば「第 31 回国会参議院農林水産委員会会議録」というものです。このように、表題＋年月日＋抽出した資料＋出典で１セットです。そして、この資料がどういう意味で重要で、ここからどのようなことがわかるかということが、章ごとに解説されます。

例二は第五章工業で掲載候補となっている苫小牧製紙株式会社の資料で、復員してきた従業員の人員配置をどう進めるかという、1950 年の社内の打合せの資料です。この文書の原本は、年代的な制約から最低限の読点のみふられている程度ですので意味がとりづらく、読者への便宜を図るために句読点を補っています。また②では、「実際、このままの表記でした」ということがわかるように横に（ママ）とふっていますが、これも収録要領で定めた処理です。

例三は、第七章の交通の掲載候補資料です。終戦直後の自動車と運送業の状況がわかる道庁の公文書で、昭和 22 年の資料ですので句読点が原本にはほとんどないことはもとより、③にあるように旧仮名遣いが使われています。句読点は補うけれども、旧仮名遣いはそのまま残すというルールにしていますので、こういった書きぶりになります。

例四は、第八章鉱業・エネルギーからの資料です。終戦直後は石炭の増産が奨励され、鉱員を励ますためのラジオ番組も作られました。ＮＨＫアーカイブスにあるそうしたラジオ音源から、文字おこしをして収録したのが例四の前半部の「ラジオ番組　炭鉱へ送る夕」です。ラジオ番組のうち座談会の部分を抽出しており、最初にアナウンサーが座談会の出席者を紹介していますけれども、発言どおりであれば姓と役職だけですが、他の資料で調べて、⑤のようにその名前を[　]で補っています。司会者も同様に、宮田の下に[輝、ＮＨＫアナウンサー]と補っています。ここまで注記を入れるとなると、作業上も時間を要しますし、他の資料でどこまで補えるのか、まだ資料が揃っていないのでつかめないところもありますが、とりあえずこうした補足も行いながら筆耕作業を進めていくということで、企画編集部会で合意されています。

なお、例四は音声資料と文字資料とからできていて、後半の文字資料の部分では、炭鉱向け番組がどのように編成されていたかがわかる資料を日本放送協会の『ラジオ年鑑』か

ら抽出して載せておりまして、２つの資料を併せて掲載する、こういう構成もありえるという例です。

以上のような形で資料の翻刻を進めていきたいと考えています。皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。

○小磯委員長

この点について、桑原先生・坂下先生から何か補足のコメントはございますか。よろしいでしょうか。皆さんいかがでしょうか。

○西田委員

翻刻されたものを拝見しましたが、補足部分なども入り、親切で分かりやすくてよいと思いました。

伺いたいことが２点ありまして、一つは、今回の企画では写真集編というのはないのですが、写真をどのように有効に使うのかという点です。資料編に写真を使う場合は、グラビアのページにまとめて載せて何ページの何番という丸振りする使い方なのか、あるいは各資料の中に入れてキャプションをつけるのか、どのような使い方になるのでしょうか。

もう一つ、横書きを縦書きに直すことにしていますけれども、戦後しばらくの時代は縦書きの文書が多いでしょうけれども、1980 年代から 2000 年に近くになるに従って横書き資料が多く出てくると想像します。横書きを縦書きにする場合は、アラビア数字を漢数字に直して表記するとなっていますが、一般的に横書きだったものを縦書きにするとかなりイメージが変わってくるものなので、どうなのかという素朴な疑問です。横書きですと後ろのページからノンブルを振っていかないといけないので、そういう編集の技術的な難しさがあってこうなっていると思いますけれども。横書き資料の占める割合がどれくらいあって、それを全部縦書きに直して、アラビア数字も全部漢数字に直しアルファベットも縦書きするということになるのかどうか、その確認と質問と兼ねてお願いします。

○小磯委員長

事務局からまずお答えください。

○靏原室長

写真ですけれども、資料編では口絵としていくつかカラーで載せることを考えておりまして、写真をたくさん載せるとすれば、通史やビジュアルを重視した概説でということになると思います。

文字を 1000 ページ載せるだけでもかなり厳選しないとはみ出してしまうと聞いておりまして、そこに写真を入れるとなると、掲載できる部分が相当減ってしまうことになります。また、写真資料が文字資料とマッチしたものなのかどうか、誤解を招く恐れもあるというところが、資料編の場合はあると思います。

なお、刊本では掲載量に限界がありますが、デジタル公開の方で入れるという方法もあるかとは思います。

坂下先生、横を縦にする割合は半分ぐらいでしょうか。

○坂下委員

もっと多いかもしれないです。歴史は縦だということで決めてしまったという感じだと思いますけれども。

なお、産業・経済部会では最初統計をどうするかということで話し合いましたが、基本的には通史で使い、資料編は文字資料を中心にすることになりました。写真についても、通史の方が収まりやすいと思いますので、資料編では口絵にするということで考えています。

○小磯委員長

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

表記のところで「横書きのものは、原則として縦書きに改める。」の後に「原資料が英文のものは、邦訳し掲載する。」とありますが、ここにも「原則として」を入れてもよいのではないでしょうか。というのは、先程ご紹介があったようにＧＨＱ関係資料や英文の資料が出てきたとき、場合によっては英文そのものを記した方が伝わる場合もあるのではないかという感じがしたので、ここだけ全て「邦訳し掲載する」という形にして後から困らないかなと思いましたが、いかがでしょうか。

○小靏原室長

資料は様々なものが出てくると思いますので、とりあえずこういう形で進め、新たに改正や追加が必要なものが出て来た時点で、企画編集部会で検討していただき、改正したり追加したりすることになると思います。

○小磯委員長

わかりました。ほかにいかがでしょうか。よろしければこの中身については、今日この委員会で了承するということで進めていただきたいと思います。

（４）その他

○小磯委員長

議事の４、その他について何かありますでしょうか。

○靏原室長

道史編さん機関誌「北海道史への扉」第２号の構成について、資料５をご覧ください。ＷＥＢ版機関誌「北海道史への扉」の発行は、昨年度の委員会で決定し、今年３月に第１号を刊行しておりますけれども、続く第２号についてはこのような構成で刊行し、来年３月 25 日から配信の予定です。

この機関誌の目的は、「道史の調査研究で得た成果を公表する」ことと、「新たな道史の構想や進捗状況を道民に周知する」ことに置いておりまして、専門の学術誌というよりも情報誌の延長のような位置づけです。北海道の歴史に対する道民の関心や、新たな道史への期待を高める一助になればということで作成しておりますが、第１号が出たというところで、委員の皆さんのご意見やご感想があればお伺いしたいと思います。

○小磯委員長

何かこの機会にご意見、ご提案でも結構だと思いますが、ご発言をいただければと思います。これはどの程度読まれているのかというチェックはされているのですか。

○靏原室長

カウンターをつけて確認しています。

○小磯委員長

ほかに何かありますでしょうか。

○坂下委員

現在編集を進めている立場として一つお願いしたいと思います。事務局体制のことですが、現在４人でぎりぎり、相当頑張っていただいていますが、なるべく現状の形を維持していただき、あまり体制が変わらないようにお願いしたいと思います。

○小磯委員長

今のご発言、このように長期にわたる編さん作業を進めていく時に、事務局体制を安定したものにしていくというのは大事なことだと思いますので、委員会でそうした意見があったということで、色々なところにその趣旨を伝えていくように心がけたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。それでは、予定された議事は以上ですので、進行を事務局にお返しします。

○杉本主幹

小磯委員長、そして委員の皆様ありがとうございました。

今後の委員会の予定ですが、本日承認されました事項やいただいたご意見を踏まえまして、今後各部会で編さん作業を進めていくことになります。そして、来年度の北海道史編さん委員会におきまして、資料編の刊行内容をはじめ、道史の活動について審議していただくことになります。

今のところ、道史編さん委員会の今年度中の開催は予定しておりませんが、部会での作業を進める中で、委員会としての審議決定が必要な事項が出てきた際には、委員長のご判断のもと、会議の開催となる場合もありますので、あらかじめご了承願います。

以上をもちまして、令和２年度第２回北海道史編さん委員会を終了いたします。長時間にわたりご審議をいただきありがとうございました。

（以上）